様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｈ００６４６

研究課題名（和文）パンデミック下の移住労働者のモビリティ・表象・関係性に関する国際比較研究

研究課題名（英文）A comparative research on mobilities, representations and social relationships among migrant workers under the Pandemic

研究代表者
長坂　格（Nagasaka, Itaru）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・教授

研究者番号：６０３１４４４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：COVID-19パンデミックが、エッセンシャル・ワーカーなどとして就労する移住労働者の就労と生活にいかなる影響を及ぼしたかを、比較研究を通して明らかにすることを試みた。具体的には、1970年代から様々な国に、多数の国際移住者を送り出してきたフィリピンに焦点を当て、ルーツを同じくするが、異なる移住ルートを辿った移住労働者たちが、いかにパンデミックを経験したかを調査し、調査結果の比較検討を行った。その結果、移住労働者たちの移住先国への編入の様式と、各国の感染症対策とが相互に作用しつつ、それら移住労働者たちの多面的なパンデミック経験を形作っていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
COVID-19パンデミックは、移住労働者の経済的脆弱性を増幅させる一方で、移住労働者の交渉力を高めたり、また、移住労働者と他の労働者や市民組織との連帯を作り出したりすることがあるなど、パンデミックの多面的な国際移住者への影響を、現地調査に即して明らかにすることができた。また、共通のルーツを持ちながらも異なる移住のルートを辿った人々の経験を比較するという方法を適用し、国際移住研究における効果的な比較方法の提案につなげた。

研究成果の概要（英文）：Through comparative research, the study sought to explore how the COVID-19 pandemic affected the work and livelihoods of migrant workers, many of whom are engaged in essential work. Specifically, the research project focused on the Philippines, which has sent many international migrants to different countries since the 1970s, to examine and compare how migrant workers with common roots but different migration routes experienced the pandemic. The results showed that the interaction between the way in which migrant workers were incorporated into the destination country and the infectious disease control measures of the destination country had shaped the multifaceted pandemic experiences of these migrant workers.

研究分野：文化人類学、移住研究、東南アジア地域研究

キーワード：パンデミック　移住　フィリピン　エッセンシャルワーク　移住ケア労働者　移住農業労働者　移住家事労働者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

新型コロナウィルス感染性（COVID-19）のグローバルな大流行（パンデミック）のなかで、各国政府・自治体は様々な感染症対策を策定し、実施した。それらの施策には、国境の閉鎖、検疫体制の強化、国内移動の制限、商業施設の閉鎖や営業制限、リモートワークの推奨など、様々なレベルで人々のモビリティを制限するものが含まれる。そのように人々のモビリティが制限されるなかで、逆に通勤や就労に伴うモビリティの持続が求められたのが、医療・介護従事者、食料品生産および農業関連の労働者、薬局や食料品店の従業員、清掃や配送関係の労働者などの、「エッセンシャル・ワーカー」と呼ばれるようになった人々であった。本研究が注目したのは、特に経済的に豊かな国において、これら「エッセンシャル・ワーカー」に、多くの移住労働者が含まれていることである。

パンデミックは、一方で、「エッセンシャル・ワーク」に従事する移住労働者たちの存在が、社会の存続にとって不可欠であることの認識を高めた。他方で、時に「ウィルスを運んでくる者」などと表象される国際移住者たちは、差別的な行為や措置の対象となることもあった。ただし、感染症対策や移住者受け入れの文脈は、移住者受入国によってかなりの違いを見せ、移住労働者のパンデミック経験は多様であることが予想される。そこで本研究では、1970 年代以降、多数の国外移住者を様々な国に送り出してきたフィリピンに焦点を当て、異なる国に住み、異なる職に就く移住労働者のパンデミック経験についての３年間の国際比較研究を行うこととした。

２．研究の目的

本研究の目的は、パンデミック下で、移住労働者たちが、いかに自らの社会関係と経済生活を再編成してきたのかを詳細に描き出すこと、第二に、同じ国に「ルーツ」を持ちながらも異なる国で就労する彼らの社会経済生活の再編過程を、移住先の感染症対策の違いのみならず、それら移住者たちの移住先国への移動経路および編入・統合の様式との関連で考察すること、第三に、それらの考察結果の比較検討を通して、国際移住を生み出し、持続させる政治経済構造、パンデミック、そして人々のエージェンシーとの複雑な相互関係を捉える研究視点と方法論を構築すること、である。

３．研究の方法

研究期間を通して、研究代表者、研究分担者、国内の研究協力者、海外研究協力者が、フィリピンから異なる国に移住した労働者たちのパンデミック経験を調査した。調査対象となった国は、イギリス、オランダ、フランス、ベルギー、カナダ、日本であった。各国の感染防止対策を注視しつつ、それぞれの国に居住する調査者が、可能な範囲で聞き取りなど実施した。

本研究の方法論的独自性は、フィリピン出身という共通のルーツを持ちながらも、異なる国で異なる職に従事する移住労働者のパンデミック経験を比較することで、それぞれの移動経路と各国の感染症対策が、いかに相互に関連しあいながら移住者のパンデミック経験に作用するかを比較検討していく点にある。

各国の調査担当者は、それぞれの調査協力者の経験に合わせて質問項目を作成したが、共通の調査テーマとしては以下の３点を設定した。

（１）対象となる人々がどのような経緯でフィリピンから当該国へと移住し、その後社会的経済的政治的にいかにホスト社会に統合されたてきた（されてこなかった）のか。

（２）移住生活のなかで、それらの移住者たちがいかなる社会関係、コミュニティを構築してきたのか。さらに出身社会とのトランスナショナルな関係は彼らの社会経済生活においていかなる位置づけを持つのか。

（３）それぞれの移住先国での COVID-19 の感染拡大、そして感染防止のための施策の実施を彼らはどのように経験し、そのなかで彼らは自らの社会経済生活をいかに再編成してきたのか。

これら調査および研究会を通しての調査結果の比較と並行して、フィリピンのスカラブリニ移住研究センターの支援を得て、パンデミックと移住に関する国際ウェビナーを開催した。本研究と関わりのあるテーマについて調査研究を行ってきた研究者を招へいし、研究期間中に、合計 5 回の国際ウェビナーを開催した。

４．研究成果

移住労働者のパンデミック経験に関する先行研究では、移住労働者は失職したり、労働時間の短縮措置に遭ったりする可能性がより高いこと、また、パンデミック下で移住者集団が他者化され、ときに差別的な措置の対象となったことなどが指摘されている。同時に、感染症対策として採られた入国制限が、すでに移住先に定住している移住労働者の交渉力を高めた事例もあった。また、移住労働者たちが、感染リスクのなかで社会の存続のために働くエッセンシャル・ワーカーとして評価され、特別措置の対象となった事例もあった。ただしパンデミックがもたらす移住労働者へのこうした多面的な影響は、移住者たちがどのようにそれぞれの移住先国に編入されたかによってかなりの違いを見せる。以下、共同研究のメンバーから研究代表者に提出された最

終報告書の内容に即して、それぞれの調査地での調査結果をまとめる。

日本では、分担者の飯田悠哉と代表者の長坂格が、農業分野で、技能実習生あるいは特定技能労働者として就労するフィリピン系労働者のパンデミック経験に焦点を当てた。パンデミック下の入国制限は、技能実習制度への依存を強めてきた日本の農業セクターに労働力不足をもたらし、移住労働者の交渉力を、一時的にであっても高める可能性があった。しかし移住農業労働者たちの多くは、パンデミック下において生活・就労条件は「ほとんど変わらなかった」と回想する。そうしたパンデミック経験理解の背景には、選択的な技能実習生の入国許可や在留資格の弾力的な運用、日本在住の労働者を雇用するための補助金支給など、政府が採った各種の施策があった。それら施策や施策の実施のあり方は、技能実習生たちの特定技能労働者への移行を推し進めた一方で、入国制限による、すでに移住先国で就労している移住農業労働者たちの生活就労条件の向上や、食料生産に関わるエッセンシャル・ワーカーとしての認知の高まりを抑制していた。

分担者である大野恵理と小ヶ谷千穂は、日本の地方における、フィリピン系ナイトクラブ従業員のパンデミック経験に焦点を当てた。特にパンデミック初期において、ナイトクラブは、いわゆる「三密」環境とされ、「感染源」としてスティグマ化されることが多かった。労働時間の短縮や営業自粛により、収入が減った女性労働者のなかには、ツテを頼り、弁当などを生産する食品加工工場に転職した者もいた。こうした転職は、フィリピン系女性移住者たちに、エッセンシャル・ワーカーとして食品生産に従事する機会をもたらした。しかし彼女たちが転職したとき、それらの食品加工工場では、入国制限で新規の技能実習生や留学生を採用できずに労働力不足となっていたうえに、ステイホームの奨励で弁当需要が増大したことによって、労働条件が悪化していた。短期間の契約で、労働条件が悪化した工場で働き続けることを余儀なくされた女性移住労働者のなかには、身体の不調を訴える者もおり、パンデミック下のエッセンシャル・ワークへの転職は、女性移住者たちの経済的身体的脆弱性を増幅させていた。

同じく日本において、研究協力者である Romeo Toring Jr.は、中国地方で主に造船産業で就労するフィリピン系技能実習生のパンデミック経験に焦点を当てた。それら（元）技能実習生たちの経験は、パンデミック開始時点でどこにいたのかによってかなりの違いを見せた。例えば島嶼部で就労する技能実習生たちは、以前から移動が制約されており、パンデミック当初は、政府による給付金もあり、自粛要請の影響を感じることが比較的少なかった。だが、移動制限が緩和され、教会などで他の在留資格を持つフィリピン人と接触することで、彼らは、技能実習生として移動が制約されてきた自らの状況を実感するようにもなった。また、すでに実習期間を終えてフィリピンに帰国していた労働者を含めて、この時期に特定技能へと在留資格の移行を果たした労働者のなかには、パンデミックのポジティブな効果を強調する者もいた。他方、来日以前にパンデミックが始まった労働者たちは、出身地社会で、いつまで続くかわからない、宙づりの時間を過ごすことを余儀なくされていた。

海外研究協力者の Asuncion Fresnoza-Flot と Kristine Busson は、パリのフィリピン系家事労働者のパンデミック経験に焦点を当てた。パリの移住家事労働者のなかには、滞在資格を持たない非正規の労働者が少なくない。フランスでは非正規の労働者もワクチン接種を受けることができたが、政府の給付金を受け取ることはできなかった。それら「ノーワーク・ノーペイ」の原則で働く非正規労働者のなかには、ロックダウンで収入が大幅に減少し、故郷の家族への送金が滞る者もいたし、感染や摘発を恐れつつも雇用主の要請に応じて勤務し続けざるをえない者もいた。他方で、パンデミック下のパリではフィリピン系の組織の支援活動が活発化し、オンラインでの集団祈祷なども盛んに行われた。そしてそのようなフィリピン系住民および労働者の連帯のもとで、亡くなった人々や病者、非正規の経済的困窮者への移住者組織による支援活動が活発になされていた。

海外研究協力者の Ferlie Famaloan は、ベルギーのフィリピン系移住家事労働者のパンデミック経験に焦点を当てた。調査協力者となった家事労働者のなかには、ベルギーでの滞在資格を持つ者も、持たない者もいたが、いずれの場合でも彼らは、「ブラック」と呼ばれる、政府に申告されない仕事に従事することが多かった。そしてパンデミックはその傾向を強化した。とりわけロックダウン下においては、当初、家事労働はエッセンシャル・ワークの定義の外にあったため、少なくない家事労働者たちが、雇用主の求めに応じ、また収入の減少を防ぐために、「ブラック」の家事労働に従事することとなった。また、ベルギーの非正規の家事労働者の語りで特徴的なのは、ベルギーでは、非正規労働者がワクチン接種だけでなく、医療支援の対象ともなっていることへの肯定的評価であり、実際、こうした包摂的な医療支援体制は、パンデミック下での非正規移住労働者へのセーフティネットとなっていた。

海外研究協力者の Roderick Galam と Lalaine Siruno は、イギリスとオランダの都市部で就労する、非正規のフィリピン系家事労働者のパンデミック経験に焦点を当てた。パンデミック下にあって、両国のほとんどの非正規家事労働者は、勤務時間が減少し、故郷の家族への送金額も減少した。そうした状況に置かれた非正規家事労働者の生活を支援したのは、教会や移住者支援を中心的活動とする NGO であった。イギリスの NGO は、ワクチン接種や医療支援を、自治体と協力しつつ展開した。オランダでは、地方自治体が、医療支援や緊急シェルターの提供などの、非正規移住労働者への生活支援を NGO の協力を得て行った。そうした支援は短期的になされたものであったが、そこで培われた非正規労働者と諸組織とのつながりは、移住者支援の NGO や移住者組織、教会関係の支援組織、労働団体、一部の政治家、赤十字などの国際組織などを巻き込み

つつ、両国において展開された、政府機関に対する移住労働者の貢献の承認と権利を求める運動につながっていた。

海外研究協力者のGlenda Bonifacioは、カナダの地方社会において、ケア施設、飲食店やホテルで就労するフィリピン系移住労働者のパンデミック経験に焦点を当てた。カナダにおいても、パンデミックによって影響を受けた労働者への給付金があったが、申告していない仕事に従事していたため、仕事量に見合った給付金が得られなかった労働者も少なくなかった。また、パンデミック下では人種差別的な言動によってレストランなどの仕事を辞めた労働者もいたし、人種差別的攻撃にさらされる不安を抱えていた労働者も少なからずいた。他方で、フィリピン人移住者組織を通して、あるいはインフォーマルなつながりのなかで、他の移住者への支援活動を行う移住者もおり、そうした支援は、出身国を越えてなされることもあった。

以上、各国の調査者による報告を、実証的知見に絞ってまとめたが、これらの調査結果は、2022年11月に東京で開催されたThe 5th Philippine Studies Conference in Japanにおいてパネルを組織し口頭発表された他、2023年10月にベルギーのブリュッセル自由大学で開催された、国際ワークショップ“COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes"で口頭発表された。今後は、これらの各国の調査報告、およびその比較検討の結果を順次公刊していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 小ヶ谷千穂、ロレイン・モラレス	４．巻 24
２．論文標題 パンデミックを生き延びる ―マニラ首都圏都市底辺層女性のロックダウン下の日常生活経験から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ジェンダー研究	６．最初と最後の頁 75-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 小ヶ谷千穂	４．巻 49(13)
２．論文標題 移住家事労働者から考える、「らしさ」の境界線	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ogaya, Chiho	４．巻 57
２．論文標題 Women’s Lived Experiences of COVID-19 in an Urban Bottom Settlement in Metro Manila	５．発行年 2022年
３．雑誌名 フェリス女学院大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 髙村 竜平，稲垣 京子，横山 智樹，上原 和甫，吉野 英岐，飯田 悠哉	４．巻 28
２．論文標題 コロナ禍における調査・研究を考える	５．発行年 2021年
３．雑誌名 村落社会研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9747/jars.28.1_45	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 飯田悠哉
2．発表標題 フード・チェーンと移住労働者：食料品製造業を中心に
3．学会等名 関西マイグラント研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 Nagasaka, Itaru
2．発表標題 (Im)mobilities, (mis)representations, and socialities among Filipino migrant workers under the pandemic
3．学会等名 The 5th Philippine Studies Conference in Japan（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Fresnoza-Flot, A. and K. Busson
2．発表標題 Coping with the economic blow of the pandemic: the case of (ir)regular Filipino migrant domestic workers in Paris
3．学会等名 The 5th Philippine Studies Conference in Japan（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Galam, R., L. Siruno and A. Gatinao
2．発表標題 Navigating the COVID-19 pandemic: The resilience strategies of undocumented Filipino migrant domestic workers in the UK and Netherlands
3．学会等名 The 5th Philippine Studies Conference in Japan（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Bonifacio, G.
２．発表標題 Differences and Transformations: Negotiating Filipino-ness in Canada during the Pandemic
３．学会等名 The 5th Philippine Studies Conference in Japan（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ono, E. and C. Ogaya
２．発表標題 Invisibilities and (mis)representation of Filipina Migrant Workers in Japan during the pandemic
３．学会等名 The 5th Philippine Studies Conference in Japan（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Iida, Y. and I. Nagasaka
２．発表標題 Mobilizing and Remobilizing Immobilized Labor: Filipino Technical Interns in Japanese Agricultural Sector and their Pandemic Experiences
３．学会等名 The 5th Philippine Studies Conference in Japan（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 IIda, Y. and I. Nagasaka
２．発表標題 Re-mobilization of Immobilized Labor: Pandemic Concessions to Migrant Agricultural Workers in Japan
３．学会等名 International Workshop on“COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes"
４．発表年 2023年

１．発表者名 Nagasaka, I.
２．発表標題 Migrant Workers udner the Pandemic
３．学会等名 International Workshop on“COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes"
４．発表年 2023年

１．発表者名 Ono, E. and C. Ogaya
２．発表標題 From Pub to Factory: Sustained Invisibility and Job Transfer of Filipino Migrant Women in Rural Japan during the Pandemic
３．学会等名 International Workshop on“COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes"
４．発表年 2023年

１．発表者名 Fmaloan, F.
２．発表標題 In the interstice of health and economy: the discourse of bio-citizenship and the black economy among Filipino domestic workers in Belgium
３．学会等名 International Workshop on“COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes"
４．発表年 2023年

１．発表者名 Fresnoza-Flot, A. and K. Busson
２．発表標題 Nuancing minorities’ COVID-19 pandemic experiences: the case of (ir)regular Filipino migrants in Paris
３．学会等名 International Workshop on“COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes"
４．発表年 2023年

１．発表者名 Galam, R. and L. Siruno
２．発表標題 Navigating the COVID-19 pandemic in hostile environments: the resilience strategies of Filipino undocumented migrant domestic workers in the UK and the Netherlands
３．学会等名 International Workshop on“COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes"
４．発表年 2023年

１．発表者名 Bonifacio, G.
２．発表標題 From essential work to essential social good: Filipino im/migrant labour and social agency during COVID-19 pandemic in Alberta, Canada
３．学会等名 International Workshop on“COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes"
４．発表年 2023年

１．発表者名 Toring, R. Jr.
２．発表標題 Filipino technical interns and specified skilled workers in Japan during the COVID-19 pandemic: oblivious, upward, suspended, and rebooted (im)mobilities
３．学会等名 International Workshop on“COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes"
４．発表年 2023年

１．発表者名 Nagasaka, I.
２．発表標題 Divergence, Ambivalence and Temporality: Filipino migrant workers’ experiences of the COVID-19 pandemic in Japan and beyond
３．学会等名 International Workshop on Northeast-Southeast Asian Migration Flows: Towards inter- and transdisciplinary perspetives（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

1．著者名 宮島喬・佐藤成基・小ヶ谷千穂	4．発行年 2023年
2．出版社 有斐閣	5．総ページ数 270
3．書名 国際社会学（改訂版）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小ヶ谷　千穂 (Ogaya Chiho) (00401688)	フェリス女学院大学・文学部・教授 (32711)	
研究分担者	大野　恵理 (Ono Eri) (40820022)	獨協大学・外国語学部・専任講師 (32406)	
研究分担者	飯田　悠哉 (Iida Yuya) (50964342)	愛媛大学・農学研究科・研究員 (16301)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計6件

国際研究集会 International Webinar: What Migration Governance for a Post-Pandemic World?	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 Intenational Workshop "COVID-19 pandemic experiences of Filipino migrant workers with common roots but different routes”	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 International Webinar: The Politics of Sanitization, the Economics of Labor Market and Migrant Agency in Asia	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 International Webinar: COVID-19 and mgiration interrupted: Policy reset and prospects for OFWs	開催年 2021年～2021年

国際研究集会 International Webinar: Filipinos in the Nordic region: Weathering and moving past the pandemic	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 International Webinar: Recurrent and new (in)visibilities in the pandemic: Filipinos in the UK, Belgium and Japan	開催年 2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フィリピン	Scalabrini Migration Center			
ベルギー	Universite libre de Bruxelles			